

「砂と霧の家」

映画の中の精神医学

小澤 寛樹 ⑩



「砂と霧の家 特別版」のDVDジャケット(ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメントから発売中)

うつ病に関する推薦映画

- ▽「素晴らしき哉、人生」(1946年・米国)
- ▽「ラスト・ショー」(71年・米国)
- ▽「ラストタンゴ・イン・パリ」(72年・イタリア)
- ▽「セント・オブ・ウーマン」(92年・米国)

この映画は米国の一軒の家をめぐる一人の女性と一族の物語です。夫との不仲からうつ状態となったキャシー(ジェニファー・コネリー)は郵便物を放置していたため税金滞納の審判が下り、亡き父が遺のこしてくれた家を差し押さえられてしまいます。行政の手違いによる差し押さえだったため、彼女は弁護士の手助けを得て、家を取り戻そうと力を振り絞ります。

うつ病を描いた

「砂と霧の家」(2003)

で働いています。安く手に入れた家を転売し、以前の生活を取り戻そうとしますが、イランの別荘に似た家で暮らすうち、彼の家族も「幸せ」と似たものを感じ始めます。境遇も現在の立場も全く異なる二人の所有者の共通点は、ある一軒の「家」に強く固執していることです。キャシーの場合は家族の幸せな思い出のよりどころであり、ベリーニにとっては祖国での名誉と富、まだ実現するかどうか分からない未来の栄光の象徴がこ

脳内神経伝達回路が異常に

の「家」だからです。家の権利を得るために常軌を逸した手段がとられ、一家を悲劇が襲うことになりました。うつ病は脳内のセロトニン系や、ノルアドレナリン系の神経伝達回路の機能の異常が主要な原因と考えられています。抑うつ気分、興味の喪失、食欲低下、睡眠障害、疲れやすいなどの

身体症状、集中力の低下などの精神面の症状が2週間以上持続し、かつこれらの症状の原因となる他の身体症状が除外された場合にうつ病が考慮されます。うつ病性障害は近年、先進国において罹患率が増加しています。未治療のまま症状が増悪していくと自殺企図のリスクが増す代表的な疾患であり、十

分な休息を取るための適切な環境と自然治癒力を助けるための薬物療法が用いられます。特に▽治療が長期化しても改善が見られない▽患者の対人関係が不安定で影響を受けやすい▽自殺念慮、心的トラウマがある▽葛藤(かっとう)の多い家族関係といった状況が重なるケースは早めに精神科専門医を受診することが求められます。「引越うつ病」という言葉があるように、家の存在とうつ病の間には深い関係があるので

思い通りにいかない状況、自分の力だけではどうしようもない問題に対して、私たちはいくつもの方法から自分なりの選択をして問題に向き合っています。キャシーは夫とアルコール、自分の感情のコントロールの問題を、ベリーニは家族との意見の相違と経済的な困難を抱えています。それらに対し「家」を手に入れることですが解決するというのは結局、幻だったのではないのでしょうか。長い間、悲観的な思

いに苦しみ、とても視野が狭い考えに陥っていることに二人は気がつかなかったのだと思います。私たちは誰でも、落ち込んでいるときは必要以上に悲観的になったり、周囲の人や自分の可能性を極端な見方で見たりします。今ある現実を客観的に見つめ、もう一度できることがないか検討することが、最も有効な問題解決法の一つです。「自分だけでは無理だ」と思ったら友人や家族、善意ある第三者に助言を求め、自分の弱さを開示できる強さも重要です。

長崎大精神神経科学教室のホームページのアドレスは、<http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/psychtry/>